



## スレイル夫人のウェールズの旅

著者	江藤 秀一
雑誌名	筑波英学展望
号	20
ページ	61-73
発行年	2001-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/8977">http://hdl.handle.net/2241/8977</a>

# スレイル夫人のウェールズの旅

江 藤 秀 一

## はじめに

1774年7月、ドクター・ジョンソンはスレイル夫妻、その長女のクイニーと共にウェールズへ約3ヶ月の旅をする。当地におけるスレイル夫人の土地相続問題を解決することが主な目的であった。この旅に関して、ジョンソンもスレイル夫人も日記を残している。ジョンソンの日記は決して長くはないが、それでも日記の記述を追っていくと、彼がこの旅においてどこに、そして何に興味を持っていたのかが浮かび上がって来る。彼はこの旅においては教会と城を訪れ、また、工場見学などを行なっている<sup>1</sup>。この旅はその前のヘブリディーズ諸島の旅行に比べると、彼の期待に十分には応えていなかったようである。ロンドンに戻っておよそ一ヶ月後の10月10日にボズウェルに宛てて、*“Wales is so little different from England, that it offers nothing to the speculation of the traveller.”*<sup>2</sup>と述べている。つまり彼はウェールズにイングランドとの違いを見つけようとしたのであるが、それほどの違いは見つからなかった訳である。このことはジョン・テラーに宛てた次の手紙の一節にも述べられている。

Wales has nothing that can excite or gratify curiosity. The mode of life is entirely English. I am glad that I have seen it, though I have seen nothing, because I now know that there is nothing to be seen.<sup>3</sup>

しかし、旅の途中で友人のロバート・レヴェットには *“Wales, so far as I have yet seen it, is a very beautiful and rich country.”*<sup>4</sup>と述べた手紙を送っている。このことから、ウェールズにおいてはイングランドとの差異はスコットランドの差異ほどには大きくなく、たいした違いもなかったが、ジョンソンがウェールズの美しさを感じていたことは間違いない。

では、スレイル夫人にとって、この旅はどのようなものであったのだろうか。

ジョンソンとの旅は、前年にボズウェルがジョンソンと行なったヘブリディーズ諸島への旅に対する一種の競争のような所があったのだろうか。Adrian Bristow は、彼女はふるさとの美しさをジョンソンに見せ、その反応を観察したかったと述べている<sup>5</sup>。しかし、彼女の日記にはジョンソンに関する記述は意外なほどに少なく、むしろ、彼女自身の真情の吐露がより多く見受けられる。その日記は自らの幼い頃の思い出の記であり、母への追憶の記であり、さらにはその母との思い出に触発されて、自らが母であるということの自覚の再認識の記録である。小論ではスレイル夫人の日記をもとに、彼女のウェールズの旅を評価して見たい。

### 1. 追憶の旅——娘として

スレイル夫人は、旅の初日の7月5日に、次の様に書き記している。

...the passing through a space of 40 miles from home with emotions perpetually changing and perpetually strong, every sign, every bush, every stone almost, reminding me of times long past but not forgotten; of incidents not pleasing in themselves perhaps, but delightful from their connection with youthful gaiety and the remembrance of people now dead, to some of which I was far more dear than to any now living.<sup>6</sup>

これは初日の夜にダンスタブルで書かれたものである。夫人は幼い頃この地にしばらくの間住んだことがあった。この記述は極めて情緒的である。出発の時間、宿泊場所などを簡単に記したジョンソンの日記とは対照的である<sup>7</sup>。ふるさとに向かうにあたって少し気分が高潮しているのだろう。日記はさらに次の様に続いて、

Here I hunted with my Uncle, here I fished and walked with my Father, here my Grandmother reproved my mother for her too great indulgence of me, here poor Lady Salusbury fainted in the coach and charged me not to tell Sir Thomas of the accident lest it should affect him, here we were overturned, and on this place I wrote foolish verses

which were praised by my foolisher Friends. (p.31)

と、この地での幼い頃の思い出を述べている。この記述も極めて情緒的であり、いかにスレイル夫人がウェールズの旅において「おセンチ」な気持ちでいたかが窺われる。

それもそのはずである。だれしも里帰りはいくぶん情緒的になるものであろう。交通の発達した現在ですらそうであるから、18世紀の道路や交通手段の未発達な状況のもとではなおさらである。彼女のふるさとウェールズとロンドンとの心理的な距離は現在よりもずっと遠かったであろうし、スコットランドやウェールズは今以上に異国のイメージが強かったはずである。ジョンソンが、この旅において、イングランドとスコットランドとの違いを見つけることを楽しみにしていたことも、このような状況の中で理解されるべきであろう。が、このような一般的な事情に加えて、スレイル夫人の個人的な事情もあった。それは2～3年前に遡る、スレイル夫人、およびスレイル家の災難の連続である。

その不幸は1772年の夫のヘンリーの投機失敗に始まる。夫はハンフリー・ジャクソンなる男に騙されたのである<sup>8</sup>。それまでスレイル夫人は家計のことなどまったく心配することなく、また、夫の事業のビール工場のことなど気に掛ける必要はなかった<sup>9</sup>。ところが、夫のスレイルはホップもモルトも使わずにビールを造る方法を発見したというジャクソンの口車に乗せられ、結局はビールはできずに、スレイル家は莫大な借金を抱え込んで倒産しそうになったのである。この事態にスレイル夫人は妊娠中であつたにもかかわらず、あちらこちらと精力的に金策に駆け回った。母のソールズベリー<sup>10</sup>の蓄えも使い果してしまうありさまであつた。ジョンソンも7月、8月はスレイル家に滞在し、彼女に忠告を与えて援助した。夫人の功あつて、この危機は何とか乗り切ることができたが、スレイル夫人は流産という辛くて大きな代償を払わねばならなかった。この一件で夫のヘスターは昔のように事業に腕を振るうことはなくなり、自信を失くし、おとなしい男に変身してしまったという。

この頃、スレイル夫人の母のソールズベリー夫人もストレタムのスレイル家に起居を共にしていた。そして不幸なことにその母は乳がんを患っており、あまり病状は芳しくなかった。スレイル夫人は夫の事業を手伝うためにこの母をストレタムに残して、自分は工場のあるサザクへ生活に移さなければならなかった。こうして夫の事業の援助と母の病気という二重の苦しみをスレイル夫人は味わうことになったのである。彼女は母を気づかって、サザクとストレタムの行き来を繰り返し、一時は心労が重なって、彼女自身の精神も不安定となっ

たことがあった。

翌1773年、3月、事態はさらに悪化する。母の病状は一進一退を繰り返し、事業もまだ安心できる状態ではなかった。そんな中、今度は夫の情事が新聞沙汰になった。夫人は夫の情事を予想外だとは思わなかったにしても、新聞で派手に書かたてられることは屈辱的なことであったことだろう。それも一度だけではなかった。また、5月には頼みとしていたジョンソンが体調を崩し、高熱を發し、失明の危険に遭う。スレイル夫人はその看病もする。6月、母が亡くなり、ついに天涯孤独となる。10月にはおじのサー・トマス・ソールズベリが亡くなり、土地の相続問題が生ずる。そして11月、愛娘のルーシーがわずか4歳で亡くなる。彼女はこの1773年を“Farewell to all I formerly loved — to my Mother, my House in Hertfordshire, my lovely Lucy — and to this accursed Year 1773”<sup>10</sup>と述べて、いとしい人々に別れを告げ、苦しかった数々の思い出と、その年に別れを告げている。

それにしても2年間に次々と押し寄せてきた苦難を並べてみて驚くことは、スレイル夫人の精神力の強さである。それまでの平凡で幸せな生活が一変し、次々と生じる不幸にスレイル夫人は大きな代償を払いながらも耐えていった。その強靱な精神力には驚かされ、感銘を覚えないわけにはいかない。

翌年の1774年、努力の甲斐あって、経済も上向き始め、旅行の話が出るほどにゆとりも出てくる。スレイル家は当初はヨーロッパ大陸旅行の計画を練るが、スレイル夫人のウェールズの土地相続問題を解決すべく、ヨーロッパではなく、ウェールズへ旅立つことになったのである。このようないきさつで実現した旅であるので、夫人の日記が感傷に浸るような書き方になるのも当然といえば当然と言えよう。

幾多の困難を乗り越えた末の故郷への旅は、亡き母のことを彼女に思い出させないわけにはいかなかった。彼女は旅の先々で亡き母のことに言及している。

7月24日、おじの Sir Lynch Cotton の建てた教会に行き、母の肖像画を見る。その時の感想を“...a picture of my Mother here which we used to laugh at for being so unlike, and now I fancy I see a resemblance. What an odd thing is the human mind!” (p. 98) と、彼女は記している。亡くなった母への想いが込められているものと思われる。どれも、これも、懐かしさで一杯なのであろう。似てないものも、あれこれと思い出してみると、ふとしたときに見せた表情に似ていることがある。そんなあれこれと生きていたときの表情を思い浮かべると、似ていないわけではないというものだ。

8月2日、一行は夫人の教区教会のある Dymorchion を経て、イタリア庭園で有名であった Llannerch を訪れる。母はこの地の所有者の Mr Davies と懇意で、この地をよく訪問していた。夫人は幼い頃、母からこの地についてよく聞かされていただけに、この地を訪れて、尚一層興味を持った。夫人は、“I took the more interest in its appearance as I had often heard my Mother say that was the house in Wales where she had spent the happiest hours.” と日記に記している。

8月23日に、スレイル夫人は生家を訪ね、そこで、洗礼を受けたときに同席していたと言う老婦人から亡き母のことを聞かされる。

...she told me many things of my poor dear Mother, what she suffered at my birth and with what anxious tenderness she watched my infancy.

母の子供を愛する心は自らの気持ちでもあったろう。お産に苦しみ、幼子を見守る母の優しい愛情は、自らも母となったスレイル夫人には分かりすぎるほどよく分かる気持ちであったと思われる。これに続けて、

Everything here is to me as a monument of her virtue and her sufferings, and every rough road I feel reminds me of the pain with which she passed these mountains, which I am now crossing for pleasure (p. 114).

と、彼女は改めて母の優しさと苦しみを思い、その気持ちを情緒的に記している。

この老女は亡き父の残酷な態度にも言及する。

The old woman, Mrs. Edwards, spoke with horror of my Father's harshness in hurrying her out soon after so dangerous a lying-in (pp. 114 - 115).

この話を聞いてスレイル夫人は男の身勝手さを改めて感じたことであろう。それは夫のヘンリーも同じことであった。彼女も夫ヘンリーの投機好き、浮気性

(当時にあつてはめずらしくはないのだろうが) によって苦しめられ、それに加えて、病気で苦しむ娘を気づかう母の気持ちを、夫は理解しようとはしないと思えたのであった。夫は当てにはならない。夫人の母に対する思いはますます強くなった<sup>1)</sup>。従つて、後日、スレイル夫人の相続する土地の管理をしているブリッジ氏から父の話を聞いたとき、

...Where I heard a marvellous tale about my Father, which I suspect was a lye (p. 109).

という手厳しい意見を彼女は述べることになるわけである。

こうして、彼女はこの旅を通して、母は “my fellow traveller, my friend, my attendant, who packed my trunks and eased all my cares” であることを発見し、 “her conversation enlivened one's mind and her observations on every thing were thought well of by the wisest ” と、その素晴らしさをたたえることとなった。そして、旅をしながら、今や母を亡くしてしまった自分は、 “who now have I to chat with on the Road? who have I to tell my adventures to when I return?” と、その寂しさを訴えている。夫人はこの日の日記を “Every place I see, every thing I hear recalls my Mother and rekindles my concern.” (p. 95) と締めくくっている。彼女の旅日記には母の思い出が付きまといっている。こうして彼女の旅は、母への追憶の旅であり、母となつて実感する亡き母の愛情の深さを再認識する旅となっているのである。

## 2. 愛情発見の旅——母として

スレイル夫人にとってウェールズの旅は娘として母の追憶の旅であつたが、それはまた、夫人自らが親としての再認識の旅でもあつた。幼い子供を亡くすという辛い経験を前年に経験したスレイル夫人が、同行していた長女のクィニーの健康に気づかうのも当然である。3ヶ月に及ぶ長旅は9歳の娘には過酷であつた。彼女の日記は、その娘のクィニーの健康記録であり、自宅に残してきた子供たちを気づかう母心の日記でもあつた。

クィニーについての言及は旅が始まった翌日の7月6日に始まる。そこでは夫人は生まれてはじめての長旅となるクィニーの体力を心配している。そして娘の為に旅程を短めにして欲しいと夫のヘンリーに希望を述べる。しかし、夫

はそれを聞き入れない。スレイル夫人はその夫の態度について、*"the apparent preference of their(=Mr Thrale and Dr Johnson)convenience to mine"* (p. 90)と述べ、娘よりも自分たちの都合を優先する男の身勝手さを指摘している。結局一行はリッチフィールドまで進むことになるが、その間、スレイル夫人は不愉快な気分であった。しかし、当日の日記に、*"made me out of humour for the rest of the way, tho' I hope I gave nobody reason to perceive it"* (p. 90)と述べているように、彼女は男たちに気を使って、その不愉快な心を見せまいとする。

こうして一行は夜中の12時にジョンソンの故郷のリッチフィールドに到着する。クィニーはやや風邪気味で、いくぶん目がただれていた。しかし、それは悪化しなかったようで、スレイル夫人一行はリッチフィールドでジョンソンの生家を訪ね、彼の友人に紹介され、歓迎され、楽しく過ごす。

クィニーが日記に再登場するのは3日後の7月10日である。

*Queeney this day took a quarter of a Scot's Pill, which I hoped would entirely carry off the cough which was going of its accord, so she had a pretty comfortable night, and was disturbed by it but once* (p. 92).

この記述からクィニーは咳がひどかったことが分かる。夫人の日記は飲ませた薬、その効果、眠りの様子など、娘の健康を細かく記録している。そしてこの日から17日までは毎日娘の病気に関する記述がある。

11日には、

*She waked at 2 o'clock and coughed till 3, again at 5 o'clock and coughed till 6. She kept up her spirits, however, and her general health, eat, and ran, and laughed as usual, and was impatient for to-morrow's adventure* (p. 92).

と記し、目を覚ました時間、咳をしていた時間とともに、全体の健康状態が記され、12日には、*"She slept without interruption from half past 8 to half past 4. The rest of the morning she coughed indeed, but she was now all alive and able to bear it"* (p. 92).



と、同様に眠りの具合などが述べられている。

13日にはクィニーの咳はさらにひどくなり、14日には“Queenie had a miserable night this night, and so of course had I. I sat up with her till 3, her fever was quite high till then, and after that she sweat a good deal and was better again in the morning” (p. 93) と記し、娘の発熱、夜の看病、そして朝の様子が述べられている。このときは「Glauber's Salts を飲ませた」という記述があることから、夫人は娘のためにいく種類かの薬を用意していたことが分かる。15日の未明までは二人は眠ることもできず、みじめな夜を過ごしたが、15日の朝には奇跡的とも思えるように、咳がおさまる。そのときの驚きぶりを夫人は、“...to my much astonishment when we rose for the day she had almost entirely lost her cough” (p. 94) と述べているが、その前に記してある“*She had a shocking night, however, and till between 4 and 5 in the morning never settled to sleep*”という夜中の状態を思うと、“to my much astonishment”, “almost entirely lost”には夫人の驚きぶりと安堵感が伝わってくる。

こうして16日にはほとんど気にする必要のないほどまでに娘は回復し、以後、娘クィニーのことについての記述がないことから、日記に記すほどの症状ではなかったと思われる。

そんな回復ぶりに安堵したのか、いくぶんの看病疲れと睡眠不足が影響したのか、16日には旧友の Mrs Dale らと会って、思い出話に花を咲かせ、楽しく過ごしたにもかかわらず、夫人は急に日記帳に涙を落とす。日記には、“Queeney's cough is now not worth thinking on, she has a slight touch of worms too, but I don't much mind that; we shall do very well” と娘の病状が記された後、

“...it's so melancholy a thing to have nobody one can speak to about one's clothes, or one's child, or one's health, or what comes uppermost.

Nobody but Gentlemen, before whom one must suppress everything except the mere formalities of conversation and by whom every thing is to be commended or censured. Here my paper is blistered with tears for the loss of my companion, my fellow traveller, my Mother... (p. 95)

と述べられている。男たちの身勝手さと、自分の気持ちを素直に表すことのできる相談相手のいない辛さを記しているうちに、彼女は亡き母を思い出し、思わず涙がこぼれてきたのであろう。スレイル夫人にとって男たちとは“mere formalities of conversation”の相手であり、その前では“suppress everything”でなければならない存在であったことは、先の6日の日記にもある<sup>12</sup>。そのように当てにならない男の気持ちや考え方はクィニーの体調が崩れるとますます強くなる。

7月の後半から元気だったクィニーだが、8月12日、三度、体調を崩す。8月13日の日記にスレイル夫人は“*She was not well yesterday, and had a touch of the headache, and looked heavy about the eyes...She took half a Scots Pill yesterday, however, which worked her this morn...*” (p. 109) と述べ、先の日記と同様に、病状や処方、そしてその効果などを記している。翌14日、クィニーの体調不良に加え、家に残してきたハリーとラルフの怪我や病気の便りが舞い込む。我が子が苦しむ様を分かち合いたいものの、夫人には話相手がいらない。彼女は“*I have nobody to tell how it vexes me*” (p. 109) と、その苦しい胸の内を記し、“*Mr. Thrale will not be conversed with by me on any subjects, as a friend, or comforter, or adviser.*” と、夫は話し相手にはならないことを述べ、ジョンソンについても、“*My present Companions have too much philosophy for me. One cannot disburthen one's mind to people who are watchful to cavil, or acute to contradict before the sentence is finished*” と、娘や息子について悩む母心を打ち明けるには“too much philosophy”であり、最後まで話を聞いてくれそうにないと諦めている。ここでもスレイル夫人が家族のことを心から打ち明けることができずに、ただ一人で悩んでいる姿が浮かんでくる。結局、夫人には男は身勝手に、家庭のことでは頼りにならない存在であり、この旅は夫人に母親の愛情の大きさ、その存在の偉大さを感じさせることになったと思われる。その気持ちはこの折に述べた

“*Every day more and more do I feel the loss of my Mother*” (p. 109). という一文に表されている<sup>13</sup>。

さて、クィニーであるが、病状はあまりよくならない。そんな娘を心配するスレイル夫人の精神状態も余りよくなかったようである。特に16日の日記では、クィニーの病状が先に亡くしたルーシーのものとよく似ていることに言及して、次のように述べている。

She is always in spirits in the morning and at night and seems to flag in the middle of the day, so I think did poor Lucy. Oh! what a horrid thought; and she is feverish too, and hot in the hand. I wish I knew what ailed her. Nothing seen or heard today leaves melancholy thoughts too much liberty (p. 110).

最後の一文には夫人の苦しむ姿が見て取れる。

そして、翌17日には“if Queeney should be well, what should hinder our doing well, and receiving amusement?...”と娘の回復を願うと同時に“...to be sure every body does wonder why I think her sick, but so it was with Lucy. All the World thought her well but me, and I was right, God help me....” (p. 111) と周りの人の無理解をここでも責め、一人で悩んでいる。しかし、ここでも弱気は禁物と言わんばかりに、この日の日記を“*But farewell, Llewenny, and farewell, dismal thoughts*” (p. 111) としめくくり、自らを勇気づけている。

スレイル夫人の母としての愛情は、7月15日の涙と8月9日の涙にも表れている。

7月15日はジョンソンの親戚のフリント夫人にお茶に招かれている。そこでフリント夫人の子供が頭痛もちであることを知る。夫人は“... a Mrs. Flint who lives in this town and has a daughter so like my poor Lucy that it brought tears to my eyes.” (p. 94) と、わが娘の病状とフリント夫人の娘の病状の類似に心を痛めて涙を流している。また、8月9日には、残してきた子供たちから届くはずだった手紙が届かず、落胆して部屋へ入って泣いたことが述べられている。

7月13日、滞在中の Matlock でのこと、さくらんぼ売りの少女が馬車にはねられた。夫人はその折りのことを、“I should mention a displeasing circumstance which happened at Matlock while I was there. A poor girl who sold cherries to the Company was half run over and greatly hurt by a post chaise suddenly and briskly driving by” (p. 93) と述べているが、幼い子を持つ親には、まさに“displeasing circumstance”であったろう。この一節もスレイル夫人の母としての気持ちが見れているように思われる。

こうしてスレイル夫人は旅の道すがら、亡き母を思い出し、母の生地を訪問し、そこで母のことを聞かされることによって、彼女は母の愛情を感じ、それ

を一緒に来ていた娘を通して、今度は母の愛情を自らが持っていることに気づくのである。同時にそのような母心は男たちには理解不可能であることも感じる。彼女はこの旅を通して、母であることの偉大さ、母の愛情の大きさ、そして母は子供にとってなくてはならない存在であることを確認したことであろう。その結果、9月30日、国会が解散し、議員である夫の選挙運動の為に急遽旅行を中断してロンドンのサザクに戻らなければならなくなった日の、次のような感想が生まれることとなったのである。

...and so all my hopes of pleasure blow away. I thought to have lived at Streatham in quiet and comfort, have kissed my children and cuffed them by turns, and had a place always for them to play in... (p. 126).

この一節にあるように、彼女はサザクではなく、子供たちの待つストレタムへ帰りがかったのである<sup>14</sup>。そこで母としての愛情を注ぎたかったのである。そして、彼女は実際にストレタムで子供たちに会う。

At noon, however, I saw my Girls and thought Susan vastly improved. At evening I saw my Boys and liked them very well too. How much is there always to thank God for!

こうしてスレイル夫人にとってこの旅は、自分が母親であることを再認識し、母親の子供に対する愛の大きさを再発見する旅となったのであった。

### まとめ

彼女の日記はもちろん行く先々で訪れたお城や教会の感想、あるいは出会った人々の様子を女性らしいタッチ、あるいは繊細な感覚で綴ってはいるが<sup>15</sup>、読者を引き付けるのはやはり旅の途中で彼女が漏らしている母親への思い、娘への気づかい、家族への気づかいの描写のほうである。この旅日記は出版を目的とはされない、あくまでも個人的な記録であり、彼女の「ノスタルジア、悲しみ、喜び、いらだち、自己評価、自己懷疑」が素直に述べられたものである<sup>16</sup>。つまり、この日記はスレイル夫人の「心の内」の記録である<sup>17</sup>。この日記の中

でスレイルは熱心な母親、母を亡くした娘、友情と尊敬を求める不幸な妻という3つの役割りを自らに課している<sup>18</sup>。子供を亡くした心の傷は彼女を神経過敏にしており、彼女はいつも以上に亡き母のことを思い、娘たちを気づかう。そんな母心を男たちに理解できるとはスレイル夫人には思えず、心の内を語り合える仲間を求め続けている。こうしてスレイル夫人のウェールズへの旅日記は、亡き母を慕う「娘」としての、そして、母との関係から学んだ「母」としての心の旅日記となっているのである。

3ヶ月あまりの旅行期間中に彼女は陽気になったり、ふさぎこんだり、ずいぶん気分にもうがある。特に一度病状がおさまったクイニーが再び発熱する8月13日以降の日記には、気分の浮き沈みが色濃く反映されている。13日は上機嫌なのに、14日は少し不平を言い、15日はやや機嫌が直るものの、16日はまったくふさぎこみ、「何をやっても、聞いても、不安な気持ちはうせない」と苦しい胸の内を述べる。17日も“God help me. But farewell, Llewenny, and farewell, dismal thoughts”と情緒的な述べ方をしていることは先にも述べた。しかし、その気分のムラを回りの人たちはあまり感じていないようである。スレイル夫人は不満を表に出さず、それを押さえ込み、一人で悩み、一人涙したのである。

本当は彼女は話したかった。母がいれば話すことができる、そして、きっと分かってくれるだろうと、彼女は旅を通して改めて亡き母のありがたさを悟ったのである。さらに彼女は、亡き母の思い出とこの旅に同行した娘を通して、子供を愛する母親としての姿を自分自身に見つけ、母親であることの尊さとその愛の大きさということも再発見したのであった。3ヶ月近くに及ぶこのウェールズの旅はジョンソンにとってはイングランドとウェールズの差異発見の旅であったが、スレイル夫人にとっては「自分発見」の旅であったわけである。

## 註

<sup>1</sup> ジョンソンの旅については江藤秀一「ドクター・ジョンソンの北ウェールズの旅」(『シルフェ』40号、2001年2月)参照。

<sup>2</sup> *The Letters of Samuel Johnson* ed. By Bruce Redford, 5 vols., Princeton University Press, 1992-94, vol.II, p. 149.

<sup>3</sup> *Letters*, vol.II, p. 151.

<sup>4</sup> *Letters*, vol.II, p. 149.

<sup>5</sup> *Dr Johnson and Mrs Thrale's Tour in North Wales 1774*, ed. by Adrian Bristow, Clwyd: Bridge Books, 1995, p. 12.

<sup>6</sup> Bristow, p. 89. スレイル夫人の日記の引用は本書からで、以下、引用頁を本文中に ( ) で示した。

<sup>7</sup> ジョンソンの日記では "11.a.m. We left Streatham. Price of 4 horses 2 s. a mile. 1. p. m. 1.40 Barnet. At night to Dunstable. On the road I read Tully's Epistles!" (Bristow, p. 31) と、いたって簡単である。

<sup>8</sup> James L. Clifford, *Hester Lynch Piozzi (Mrs. Thrale)*, Oxford: Clarendon, 1952, p. 92; Christopher Hibbert, *The Personal History of Samuel Johnson*, New York: Harper and Row, 1971, p. 236 など。

<sup>9</sup> Clifford, p. 92, 以下、この項は主に Clifford およびバット・ロジャーズ、『ジョンソン百科事典』(永嶋大典監訳、ゆまに書房、1999) によった。

<sup>10</sup> Clifford, p. 110, Bristow, p. 12.

<sup>11</sup> 2の「愛情発見の旅——母として」参照。

<sup>12</sup> "The clock struck 12 at Lichfield soon after we got in, and I had many feelings for Queeny which I was forced to suppress, as I was often told how little it signified whether she catch'd cold or no." (p. 90) とある。

<sup>13</sup> 別の日記で夫人は "My Journey was upon the whole very uncomfortable; I took no maid, ...no female to speak to" と女性の話し相手を欲している (*Thraliana* ed. by Katharine Balderston, Oxford: Clarendon, 2 vols., 1942, p. 113)。また Maid servant に関しては同書で「夫が未熟で女性の世話係を連れてくるのを忘れた」と批判している (p. 342)。

<sup>14</sup> 別の日記でも "And now a sharp Contest for Southwark, and a *Borough Winter*, which of all other Things I most abhor." と嫌悪感をあらわにしている (*Thraliana*, p. 316)。

<sup>15</sup> 例えば 7 月 25 日の Hawkstone の記述、あるいは、8 月 3 日の感想など。

<sup>16</sup> Theresa A. Dougal, ' "Strange Farrago of Public, Private Follies" : Piozzi, Diary, and The Travel Narrative' in *The Age of Johnson* 10 edited by Paul J. Korshin, New York: AMS Press, 1999, p. 201.

<sup>17</sup> Dougal, p. 202.

<sup>18</sup> Marie E McAllister, 'Gender, Myth, and Recompense: Hester Thrale's Journal of a Tour to Wales, in *The Age of Johnson* 6, Edited by Paul J. Korshin, New York: AMS Press, 1994, p. 276.